

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520486

研究課題名(和文) 近親言語ポルトガル語・スペイン語間の移行教育と教授法

研究課題名(英文) On transfer learning between two cognate languages, Portuguese and Spanish, and its methodology

研究代表者：

水戸 博之 (MITO HIROYUKI)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：80262921

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、近親関係にあるポルトガル語とスペイン語の関係を分析し、これら2言語と文化への理解に寄与することである。3人の研究者による海外調査4回と数回の国内調査を通じて、各研究者が専門とする分野で数多くの新しい知見が得られた。

成果の得られた主な項目は次のとおりである：

アルゼンチンおよびウルグアイにおけるポルトガル語教育とブラジルにおけるスペイン語教育の共通点と相違点、2言語の混成的あるいは中間的形態であるポルトニョールと2言語相互の言語干渉、ブラジルとアルゼンチン・ウルグアイの南米南部地域2言語文化における音楽文化の伝統の継承と相互交流による新たな創作活動、滞日経験を持つブラジル人子弟と在日ブラジル人子弟の言語学習環境および言語使用。

なお、以上の研究データに基づき、移行教育と教授法の実践的応用として、主に日本人スペイン語既習者を対象にしたポルトガル語教材の試作が行われた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to analyze the relationship between two cognate languages, Portuguese and Spanish, in order to contribute to the understanding of these two languages and their cultures. Three researchers realized four instances of fieldwork in South Latin-American countries and several more in Japan, and obtained many new findings in their specialized fields.

The main achievements are as follows:

Common features and differences between two teaching systems: Portuguese teaching in Argentine and Uruguay, and Spanish teaching in Brazil; "Portuñol": a mixed or intermediate variation formed from the two languages and their reciprocal interference; transmission of regional musical cultural tradition and new creative movements through exchanges between two southern South American language cultures in Brazil, Argentine and Uruguay; language learning conditions of Brazilian children who have experienced stays in Japan or are living in Japan, and their language proficiency.

In addition, based on the above mentioned research data, experimental Portuguese learning materials, principally directed at Japanese who have learned Spanish, were created as a practical application of transfer learning and its methodology.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究代表者の専門分野：スペイン語・ポルトガル語

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：ポルトガル語・スペイン語・外国語教育・社会言語学・ラテンアメリカ・芸術諸学・文化・異文化コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

本研究は、当初、二つの問題意識から出発した。第一点として、近親関係にあるポルトガル語とスペイン語の特に口語における共通点と相違点を言語学的に比較対照し分析すること。第二点に、両言語の分析結果を二言語の母語話者である南米人との接触の機会が飛躍的増大しつつある日本社会に実践的に活用できないかということであった。

(1) 開始時の研究状況

当該2言語は、言語学の分野においては、いずれも系統的にロマンス語族に属し近親関係にあることは自明のこととされている。だが、実際に使用されている2言語の同一性と差異に関する知見は、従来、旅行者や両言語が同時に使用され接触する国境地域で生じている、例えば綴りや語形が類似した語彙による誤解に端を発したトラブルなどから得られた経験則を大きく越えたものではなかった。学問的批判に耐えうる比較対照研究および2言語母語話者間相互の言語学習と教育が本格化したのは、比較的近年になってからのことである。具体的には、1986年のスペインとポルトガルのヨーロッパ共同体加盟や1991年にブラジルやアルゼンチン・パラグアイ・ウルグアイ南米4カ国のメルコスル（南米共同市場）結成といった地域統合の動きが活発になってからである。

(2) 研究開始時の2言語の関係に関する知見

両言語の関係については、英仏語など他の外国語に習熟し高等教育を受けたいずれかの母語話者であっても、多くは単に漠然とした近親性以上の認識を持っていない。ポルトガル語からスペイン語を、あるいはスペイン語からポルトガル語というように、近い関係の言語の学習は、一見すると容易に思われ、また容易であることは一面的には事実である。しかしながら、この容易さは正確に学ぶことの障害にもなりうる。このことは、研究代表者・水戸の留学生に対するスペイン語教授経験において、フランス語話者とドイツ語話者の筆記試験の成績が、言語的に距離のあるドイツ語話者の方が一般に勝っていたことからいえる。他方、スペイン語とポルトガル語各言語の留学生母語話者によると、日

常的な会話における各母語間の相互理解は可能とはいえ、3割程度であるという。以上の事例を直接的な知見として問題意識形成の出発点とした。

(3) 混成語ポルトニョール

研究準備段階で、上述のブラジル・アルゼンチンを中心とする南米共同市場での経済的・文化的交流が盛んとなった結果、ポルトガル語圏とスペイン語圏の国境近辺で両言語の混成的現象生じポルトニョールと呼ばれている。この名称自体が、ポルトゲス（ポルトガル語）とエスパニョール（スペイン語）の合成語である。従来、他言語の要素が混入した純粹でない中間語という否定的あるいは言戲的呼称であったが、当時すでにいわゆるクレオール化やピジン化とも異なる言語として国境地域では社会的認知をされていた。

このポルトニョールという現象は、一見したところ日本から遠隔の南米での特殊な事例に思われるが、日本国内においても同様な現象は断片的ながら研究開始時点でも報告されており、また十分に生じうる環境が醸成されていた。すなわち、日本国内では、約10年前の時点ですでにブラジル人とペルー人を中心とした南米人定住者は30万人を突破していた。2001年末の法務省が発表した外人登録者統計によると在日ブラジル人は265,962人、ペルー人者は50,052人である。一方、南米と日本の相違点として、ポルトガル語とスペイン語の話者数から見た両言語の力関係の逆転がいかなる影響を相互にもたらすかという問題が研究課題として浮上した。南米および世界的にはスペイン語が4億人の話者を擁するに対して、ポルトガル語は2億人程度であるが、日本国内では、実質的にブラジル人であるポルトガル語話者に対する全スペイン語話者を合計した比率は5対1と大きく関係が逆転する。そして、この段階において、特にスペイン語母語話者児童にポルトガル語の影響あるいは干渉とみられるある種の誤用がすでに散見された。

2言語の混成現象あるいは中間的形態という視点を言語学的分析の主要な点として設定した。

(4) エスニックメディア

日本国内の2言語をめぐる約20年間の環境の変化を顕著に示す事例として、30数万人の南米人を中心としたブラジル人ポルトガル語話者とスペイン語話者を対象にした各言語により発信される媒体、いわゆるエスニックメディアの誕生がある。

残念ながら、経済危機以降、有力紙の休刊やデジタル版への移行、24時間放送のスペイン語テレビの終了、名古屋スタジオの閉鎖など、規模の縮小が続いている。しかし、依然として日本国内の2言語の状況、特に変容を直接的に知ることのできる重要な情報源であることから、本研究の資料として活用した。

(5) 日本における2言語の学習状況とブラジル人コミュニティ

現在日本では、約20のスペイン語圏専攻の学科が設置され、スペイン語を第二外国語の選択肢に採用している大学も多い。また、2001年度のNHKスペイン語テキストの購入部数はテレビ版が月平均11万部・ラジオ版10万部であった。以上のことから、初歩的スペイン語の知識を有する日本人はかなりの数にのぼると思われる。他方、ポルトガル語は、大学学部段階の専攻科あるいは相当機関が5つ、近年、選択外国語科目としての開講が増えているとはいえ、スペイン語の開講数から見ればわずかである。ちなみに同年度NHKテキスト部数に関しては、ブラジルポルトガル語は年2回の販売で平均3万部であった。

以上の状況は、単に日本国内の各言語話者数から見ても、日本人学習者および学習機会と社会的需要との不均衡を示すものである。実際、ポルトガル語が社会的に必要性の高い言語であることは、特に東海圏においてはブラジル人の人口比率から公共機関相談センターでポルトガル語の通訳が常勤している所が多いことから理解できる。

以上のような言語環境を改善するためにはポルトガル語の基礎知識の普及が大きな意味を持ちうるが、本研究の出発点の一つに日本人のスペイン語既習者の知識を活用できないかという問題意識があった。

(6) 文化的要素、特に音楽文化

研究開始時においては、日本国内における情報の制約もあり、近親言語2言語の分析が言語習得の領域に偏り、ともすれば文化的社会的背景を看過する傾向があった。また、ラテンアメリカを一体として把握しようとし

ていたことから、個々の文化事象と言語との関係性についての認識が十分であるとは言えなかった。後述のように、一回目の海外調査の反省から、言語文化と密接に関連する音楽文化を専門とする西村秀人を連携研究者に加え、研究組織を改組した。

2. 研究の目的

本研究は、近親関係にあるポルトガル語とスペイン語の共通点と相違点を言語文化の視野における言語学習と異文化理解観点から解明することを意図したものである。この目的は、具体的に次の3つの分野で探求され、それぞれ一定の成果を得ることができた。

第一の分野の目的は、ロマンス語比較言語学における特に比較文法の観点から、ポルトガル語とスペイン語は言語のどの様相が共通であり異なるのかを分析することである。研究目的の最も基礎的部分である。

第二の分野は、効率的な言語習得である。かなりの数に上ると考えられる日本人のスペイン語基礎既習者にとって第二言語（スペイン語）から第三言語（ポルトガル語）習得のプロセスや教授法を体系的に示す。具体的な成果の形態は教科書等、学習書である。また、この研究は、二言語いずれかの母語話者にとっても、他言語学習において、一定の注意や意識を持つことによって、効率的な学習が可能であることを示すものとなる。

第三の分野は、近親関係にある両言語文化圏の特徴が最も顕著に現われる音楽文化とその異文化理解としての言語学習における様相の分析である。第一年度目の海外調査の成果から発展的に重点分野として取り上げたものである。

3. 研究の方法

言語文化を基盤とする2つの地域のフィールドワークと関連領域の研究者の学際的連携が本研究を推進する方法論の基本的コンセプトである。

2つの地域とはスペイン語とポルトガル語が使用される南米と日本である。2言語の関係を調査するフィールドを公用語とする南米各国のみならず、日本国内の南米人コミュニティをも対象とし、比較考察を行った。2つのフィールドを研究の視野に置き対照を試みたことは独創的な点といえる。

海外調査が大きな比重を占め、アルゼンチン、ブラジル、ウルグアイの3カ国のべ4回実施した。なお、研究期間中、経済危機や新型インフルエンザといった予期せぬ悪条件にもかかわらず、連携研究者2名の努力により海外調査を継続できたことを付記する。以下参加3名の研究者の分野と研究計画との

関係の概要を示す。

水戸博之（研究代表者）は、以前から聖書各国語版の対照研究をロマンス語比較文法の観点から行ってきた。2言語の言語学的比較と教授経験に基づき、教育システムと機関について主にアルゼンチンのブエノスアイレスで調査研究を行った。

重松由美（研究分担者、第2年目から連携研究者）は、言語習得における2言語の接触と干渉を主要な研究課題の一つとしてきた。移行教育と教授法の資料収集と調査を主にブラジルとサンパウロで行った。また国内のブラジル人の言語状況についても調査を行った。

西村秀人（連携研究者）は、文化的諸相の調査の充実を図るため、第2年目から参加した。ラテンアメリカの音楽を中心とした文化史に精通することがら、ブエノスアイレスとモンテビデオで、大学付属研究所等研究教育機関、芸術音楽関係者を通じ、2言語文化の活動や両者の接触に関する資料収集を行った。

連携研究者の参加により、言語を機軸としつつ広い視野の研究が達成できた。

4. 研究成果

実質的には2年半の研究期間であり、本研究終了後も後述のように、新規の研究へ発展的に継承した内容も多いことから、年度毎に研究成果をまとめる。

第1年度（2007）水戸がアルゼンチンにおけるポルトガル教育の現状、重松がブラジルにおけるスペイン語教育の現状および渡日経験者の言語状況を調査した。この段階ですでに、両国の隣国とその言語に対する認識が、必ずしも双方向のものではないことが明らかになり、研究の視野をより文化的領域へ拡大する必要が生じた。すなわち、アルゼンチン人にとり、ポルトガル語学習はブラジル社会と文化を学ぶことを意味するが、ブラジル人にとってアルゼンチンは選択肢の一つに過ぎないということである。

第2年度（2008）前年度の調査結果から、研究体制を見直し、重松を連携研究者に変更し、さらに西村を連携研究者に加えた。西村は、スペイン語とポルトガル語が隣接および接触するラプラタ地方の言語文化の状況を調査した。現在スペイン語を公用語とするウルグアイの首都モンテビデオにおいてスペイン語とポルトガル語使用に関する歴史文献の収集は、大きな成果であった。重松は、第1年度の調査において収集した資料の分析を行い、教授法への応用として、ポルトガル語学習メソッドの研究に着手した。水戸は、2言語を文法的側面からの比較対照研究を進めた。

第3年度（2009）西村が前年度に引き続きラプラタ地方、特にモンテビデオにおいて得た新たな知見である2言語接触の言語

文化的創造の事例として音楽舞踊「ムルガ」を核とした地域活動を調査した。なお、調査の一部は評論記事等に言及されている。重松は、諸般の事情から、国内における研究に専念した。先行する2年間のブラジルをはじめとする調査の分析結果と在日ブラジル人の言語学習環境との対象研究から、論文等の執筆、学会発表を行い、さらに成果の応用として、スペイン語を既習した日本人に配慮したポルトガル語教材を試作段階まで進めた。

水戸は、スペイン語・ポルトガル語2言語を専攻する海外の研究者との情報交換を進めた。

当初、最終年度としていた平成22年度において研究成果を総括し、まとめて発表する予定であった。幸い研究計画最終年度前年度応募基盤研究（C）22520559「スペイン語・ポルトガル語近親言語文化圏間の外国語教育と相互理解の諸相」が採択されたことから、現在、資料の整理分析を行っている文化の諸相を中心として、新規研究計画の進行と並行して適宜具体的成果を発表していく。

なお、教授法の開発と製作については、特にポルトガル語に関して、重松がブラジル等で収集した資料やデータに基づき、主に大学の授業における使用を念頭においた教科書の試作原稿の形で平成21年度にひとまず完成した。現在、担当のポルトガル語授業で試用しつつ改善を加え出版へ向けて準備を継続している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① 水戸博之、アルゼンチンにおけるポルトガル語教育とブラジルにおけるスペイン語教育、言語文化論集（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）、第33巻第1号、ページ未定、2011、査読無

② 重松由美、在日ブラジル人のエスニック・アイデンティティーブラジル人学校の保護者への教育に関するアンケート調査の結果に基づいて、ともに生きる - 2009年度報告書（名古屋学院大学総合研究所多文化共生研究会編）、30-39、2010、査読有

〔学会発表〕（計2件）

① 重松由美、ブラジル人学校児童生徒による日本語使用、多言語化現象研究会10周年記念研究大会、2009年6月20日、国立民族学博物館

② 水戸博之、アルゼンチンにおけるポルトガル語教育、日本ポルトガル・ブラジル学会関西西部会、2008年3月21日、京都外国語大学

〔その他〕

雑誌記事（評論等）（計5件）

- ① 西村秀人、ウルグアイ音楽の才人、レオ・マスリア (インタビュー)、LATINA、2011年3月号 pp. 20-21
- ② 谷本雅代、西村秀人、ディアン・デノア-マテオとの出会いから肉親との別れ、歌から離れ、歌に戻るその理由、LATINA、2011年3月号、22-23
- ③ 西村秀人、カンドンベの職人〜フェルナンド・ロボ・ヌニェス・インタビュー、LATINA、2011年2月号 pp. 18-19
- ④ 西村秀人、21世紀のタンゴ・マエストロたち〈62〉ウルグアイから世界へ、そしてタンゴへ〜フリオ・フラデ (インタビュー)、LATINA、2009年11月号 pp. 90-91
- ⑤ 西村秀人、21世紀のタンゴ・マエストロたち〈61〉タンゴとジャズの同時代性を求めて：ディエゴ・スキッシ、LATINA、2009年10月号、88-89

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水戸 博之 (MITO HIROYUKI)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授
研究者番号：80262921

(2) 研究分担者

重松 由美 (SHIGEMATSU YOSHIMI)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・非常勤講師
研究者番号：80447846
(H19→H20：連携研究者)

(3) 連携研究者

西村 秀人 (NISHIMURA HIDETO)
名古屋大学・大学院国際開発研究科・准教授
研究者番号：90402411